五味川純平著作集

第14巻

戦争と人間

(3)

五味川純平著作集

第14巻

戦争と人間(3)

三一書房

五味川純平著作集 第14巻（全20巻／第3回配本）
戦争と人間(3)
一九八三年 九月十五日 第一版第一刷発行

定価 三五〇〇円
著者 五味川純平 ©一九八三年
発行者 菊地喜三次
発行所 株式会社三一書房
〒101 東京都千代田区神田駿河台二の九
☎03（291）3131
振替東京9－84160

印刷 北京市印刷工業公司（本文組版）
暁印刷株式会社（本文印刷）
東洋美術印刷株式会社（扉・函印刷）
製本 東京美術紙工 製函 高田紙器
装丁 熊谷博人

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
Printed in Japan

五味川純平著作集　第十四巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

戦争と人間

髑髏の舞踏　第二部

1

昭和七年五月十五日。

その日は、夕方まで、他の日と違ってはいなかった。初夏というにはまだ少し早いが、さわやかな日曜日であった。陽脚が長くなって、黄昏の訪れはおそかった。

矢次は濠ばたを歩いていた。足が自然に伍代家の方へ向いている。そこからはまだかなりあるのだが、歩いて行ってもくたびれるほどではない。

妻の僚子は「おつき合い」で映画を観るとかで、出かけて行った。出しなに、

「あなたは、また伍代さんでしょ」

と、底意のある眼つきで云った。

「行ってもいいわよ。由紀子さんは、どうせ、あなたなんか真剣に相手にしやしないから」

「そうかな……」

矢次はうるさそうに、これも底意地悪く呟いた。

僚子が出かけたあと、矢次は専門書を読みだしたが、身が入らなかった。陽気のせいかもしれない。行こうと思えば直ぐ行けるところに、由紀子がいるからかもしれない。

矢次も家を出た。はじめは、一人でいる標耕平の様子を見に行ってやるつもりであった。途中で気が変った。濠ばたの鮮やかな緑と水を見ながら歩きたくなった。標少年のところへは、夕方になってからでもかまわない。

濠ばたを歩きながら、矢次は、足が伍代の方へ向いているとしても、伍代へは行くまいと思った。柘植大尉が東京

にいないことが、奇妙な負担になっている。奉天では、確かに、柘植もいず、僚子もいないことに便乗したも同然だったのだが。

反対方向から円タクが走って来て、矢次とすれちがった。一瞬の印象で、陸海軍の若い将校がぎっしり乗っているようであった。同じような車が二台つづいた。

軍人が乗っていても不思議はないわけだが、矢次は何か異様なものを感じて、立ち停り、見送った。だれか、有名な軍人に不幸でもあったのかもしれぬ。矢次の想像は、その範囲を出なかった。

七十八歳の高齢でようやく首相の座についた犬養毅は、首相官邸の日本間で、安楽椅子にくつろぎながら、煙草をくゆらしていた。

それから数分後に、突然、邸内が騒がしくなり、死神の一隊が襲ったのである。

犬養首相遭難の模様を再現する必要はあるまい。土足のまま闖入した一群の海軍士官や陸軍士官候補生が突きつけた拳銃を前にして、

「話せばわかる。靴ぐらい脱いだらどうじゃ」

と云ったことや、山岸海軍中尉が、

「問答無用。射て！」

と命じたこと。

暗殺者たちが引揚げたあと、重傷を負った犬養が、

「あの乱暴者どもをもう一度連れて来い。わしがよく話してやる」

と云ったことなど、既に伝説となっている。

伝説となっていない部分は、犬養首相が暗殺された理由として公表されているものを、一皮めくったところにあり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

暗殺者たちが国を憂えて兇行を演じたとされている心情の裏側にある。

五・一五事件は、ある意味では不可解な事件であり、別の視点からは、ばかげた事件である。(註一)

犬養首相は、直接的には黒岩勇・海軍予備役少尉の第一弾、三上卓・海軍中尉の第二弾によって死に到らしめられたのだが、犬養を殺したのは何だったのか？

古賀清志・海軍中尉が率いる第二組は、内大臣・牧野伸顕の官邸を襲い、警備の抵抗もなかったのに、目標人物に微傷も負わせずに引揚げたのはなぜだったのか？

中村義雄・海軍中尉が率いる第三組は、政友会本部の玄関に手榴弾を投じた程度で引揚げたのは、何の真似だったのか？

民間人・奥田秀夫の第四組が丸ノ内三菱銀行の裏構内に手榴弾を投げて逃走したのは、何のつもりだったのか？

橘孝三郎門下の別働隊七名は、六ヵ所の変電所を襲って「帝都」を暗黒の街とする目的を持ちながら、変電所の機能を停止せしめるだけの知識も技術も持合せず、妄動するのみで目的の一つをも果さなかったのは、なぜなのか？

五・一五は四年後の二・二六に較べて、規模が小さいことは別として、計画と実行の杜撰、稚拙の点でははるかに劣り、流説を盲信した軽率さにおいては相似ており、時流に投じ得た点では実力以上の効果を収めた。

五・一五事件が政財界人に衝撃を与えたことは事実なのである。それが一味の必要充分条件であったとすれば、一味は目的を完全に果したことになる。けれども、それは暴挙一味が計算した結果ではない。一味の画策を事前にかなりの程度に諜知しながら、野放しにしておいた一連の勢力系統があった結果である。

伍代由介は、その日、由紀子を連れて、市来善兵衛とゴルフに行った。

日が暮れてから帰宅すると、秘書の武居が、

「犬養さんがやられたらしいです」

と、さっそく注進に及んだ。
「警視庁も襲ったらしいですが、今日は日曜で無人でしょう、大したことにはならなかったようです」
由介には表情の変化は現われなかったが、黙って立っていたこと自体が、驚いた証拠といえなくもなかった。井上準之助、団琢磨と暗殺がつづき、あとをひくとは由介自身が予言していたことである。
「高橋さんや実業家は、やられなかったかね？」
「三菱銀行だけです。建物がほんの少々やられただけらしいですが……」
「……三井の団さんをやったから、今度は三菱か」
由介は階段の方へ動きだして、
「だれだね、やった連中は？」
「制服を着た軍人です。海軍の」
「海軍？」
由介はまた立ちどまった。
「陸軍ではないのかね？」
「陸軍もいるようですが、主謀者は海軍らしいです」
武居は、これも立ち去りかねている由紀子を見て、手柄顔になった。
「私の推測ですが、森書記官長が一枚嚙んでいるのではないかと思います。あの人は、爺さんの、いや、犬養首相の守りをしきれなくなったとこぼしていたそうですから。なにしろ、森さんは、犬養・芳沢の姻戚外交とは根本的に合いませんからね。森氏は、平沼・鈴木連立内閣か何かを考えていたでしょう。軍部・森の筋金を背骨にして。しかし、去年の三月、十月のことがありますから、陸軍を表面に出さないようにして、海軍の若手に主導権を持たせたんじゃありませんか。海軍にはロンドン条約のくすぶりが残っています。いい材料だったと思いますが……」
「めったなことを云うもんじゃない」

由介は武居を残して階段を昇り、居間で滝にかしずかれて着替えた。
「英介はどこへ行った？」
「浅倉さんのお嬢さんがおみえになって、お出かけになりました」
「のんきな奴だ。あいつ、あの娘さんと世帯を持つ気なのか」
「どうでしょうか。浅倉さんのお嬢さんの方は御熱心のようですけれど……」
「以前に懇意にしていた人があったな」
「……久滋さんでございますか」
「いまは狩野というんだろう。亭主思いのいい妻君になった。浅倉の娘はどうかな？」
由介は話しながら、思考はその日の事件の周辺を走りまわっていた。
「……一風呂浴びよう。武居に云ってくれ。葉室という男と二、三日うちに会いたい。武居は知っているだろう」
由介は、とっぷりと湯につかって、考えた。
犬養総理がやられたのは、満洲処理問題をめぐって、政友会に内紛があったためかもしれない。武居が云うように、軍部と結託している森恪の一派が、満洲独立という露骨な政策に反対した犬養総理を排除しなければ、意のままにならなくなったためかもしれない。そうだとすれば、そのかぎりでは、伍代由介にとっては有害な出来事ではない。けれども、軍人が暴力に訴えてほしいままに政治を動かす傾向が助長されては、やがて禍はすべての実業界に及ぶだろう。軍人は国富の番人であって、主人ではない。その意味では、この事件は、大きな危機の前兆と見るべきであるかもしれない。
由介は、湯のなかで、ゆるやかに手足を動かした。
今後は、もっと詳細に軍の動向を事前に探知する必要がある。
由紀子は、自分の部屋の窓から、庭園灯に照らし出されている芝生の明るい輪を見下ろしていた。そのあたりは、いつか、柘植大尉が俊介に剣道の稽古をつけてやったところである。柘植は上海から帰還すると、金沢の師団司令部

付になって、東京へは戻って来なかった。由紀子は、しかし、柘植が、この日の事件に参加するために東京に潜入していて、逮捕される身を、ほんのいっときでも由紀子に会うために、ひそかに訪ねて来ることを空想した。こうした空想ほど、生き生きとして、切なくて、甘悲しくて、充実しているものはなさそうであった。

柘植はどう云うだろうか？　何事もなかったような顔をして、カチンと踵を鳴らして、切れのよい挙手の敬礼をして、

「お久しぶりでした。お変りありませんか」

そう云うだろう。

由紀子は、自分がどう答えたくなるかを想像してみた。思い出したのは、柘植が台湾の霧社事件調査から帰って来たときのことである。そのとき、由紀子は、別れぎわに囁いたのだ。

「タイヤル族の男と女の踊りを真似してみたくはありません？」

由紀子は、まだそれを果してはいなかった。柘植が、もし今夜現われるとすれば、まさしく『出草』（首刈り）から戻ってのことである。由紀子は片手を高くかかげ、片手を腰に添えて、腰を激しく振りながら横へ移動し、前へ進み、後ろへ退いてみた。

庭には、やはり、人影はなかった。廊下にも足音はしなかった。

2

葉室は、伍代由介と会うのに、指定された料亭を避けた。壮士ふうの男や情報屋なら、たいてい好んで入るところだが、葉室はそうしなかった。代りに、雑踏する繁華街に時間と場所を指定して伍代の車を呼びつけ、乗りこんで、

伍代家の門内へ素早く姿を消した。
「用心がいいですな」
と、由介が迎えると、
「近ごろはイヌが増えました。それに、うっかりして西田税の二の舞は御免ですから」
民間にあって下級将校の革新分子を掌握している西田税が、五・一五当夜、井上日召門下の川崎長光から瀕死の重傷を負わされたことを云ったのである。
「私は西田のような革命屋ではありません。御存じのとおりの情報屋です」
葉室は落ちくぼんだ眼を据えて云った。
「しかし、革命屋たちが私のように用心深ければ、事は成功するでしょうね。私は自分のいのちと金がほしいために用心深くしているだけですが」
「なるほど」
由介は探ぐりにくい相手の眼を、静かに見守った。
「西田という人がやられた理由は何ですか？」
「……一つは、去年の十月事件の泥仕合ですね。西田が売ったと大川周明一派から宣伝されたこと。それに西田は、井上日召の理論のない生臭坊主の革命を罵倒したり、今度の件では陸軍将校を抑えて参加させなかったことを憎まれましたね。もう一つ、士官候補生が満洲戦跡見学から帰ると直ぐに富士の裾野へ演習にやるよう仕向けて、海軍士官との同盟を破綻させようとした。そんなふうに見られたせいでしょう」
由介は、西田税のことなどは、まだどうでもよかった。軽くうなずいていて、なんでもなさそうにきいた。
「……海軍士官は何を怒ったのですか？」
「一概には云えないでしょう。艦上勤務者が多いから、泊地へ戻ったときでないと、何もやれない。そういうあせりがありますね。理由は、いろいろです。一つはあなた方がお作りになっている」

由介は擽ったそうに苦笑した。
「政界、財界の腐敗云々ですか」
「そうです」
「しかし、みなさん御存じなのですかね、実際のところを。何が、どう腐敗しているのか」
「金にモノを云わせるところが、癪の種なんでしょう」
「金は力の尺度です。国内的にもそうだし、国際的にもそうです。なるほど私たちは金を使う。贅沢もする。しかし、みなさんが日曜祭日に休んでおられるときにも、私たちは休んではいませんよ。鎬を削って戦っていますね。それを全体的に捉えてみると、綜合的な国富の増大ということになって来ている。気に入らんから財界をぶっ飛ばせもいいでしょう。ぶっ飛ばして、今度の士官さんたちが国造りをなさる。そこへ、欧米列強から経済的に一大痛棒をくらったら、日本の存在は忽ちかすんでしまいやしませんか。これは若い軍人さんたちにとっても、甚だ不本意なことだと思うが……」
「実業家常套の論理ですね」
葉室の落ちくぼんだ眸には、何の感情も現われなかった。
「たぶん、おっしゃるとおりでしょう。連中が憤慨するのは、農村の甚だしい窮乏と対比してのことです。今度の事件に加わった民間人に後藤圀彦というのがいます。橘孝三郎門下生の筆頭ですね。小学校の教員なんですが、欠食児童が多いので、自分の月給や食事を割愛して、ひそかに欠食児童に与えていたらしいです。これなんかから見れば、児童が飢えて、何が国の栄えだと云いたくなるでしょう。大都会の歓楽街の灯を見れば、暗黒の闇に叩きこんでやりたくもなるでしょう」
「わかりますね、その気持は。しかし、そういう農村の人たちが、実は政友会を絶対多数党にした事実を無視しておられる。政友会は云っていますよ、わが党は農民党であるとね。票を入れておいて、射ち殺すというのはどうですか。それはまあ、別の話にしましょう。私がうかがいたいのは、葉室さん、海軍士官が徒党を組んで、イニシアチー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com